

Architecture as Architecture

# 建築の生命性

これからの建築設計手法と建築の存在について

近代の超克を目指す 21 世紀は環境の時代と言われる。本設計ではとりわけそれを”生命”の時代と呼びたい。”生命”とは「生きていく」ことより「生きている」ことであり、「Life」より「Existence」である。つまり相対化されない、自己完結した、存在それ自体の価値である。

21 世紀の不明瞭な未来を思考する建築は、社会善や与条件に依拠した弁証法的プロセスによって生成される他律的建築ではなく、生物・無生物の境界を超越した”生命”と”自由”を謳い、生を祝祭し、世界と交感する自律的な建築であろう。

建築における”生命性”は、建築を建築から考え、最適化のための相対化を回避し、遠心的な多様性を生成し続ける非淘汰の設計態度によって獲得される。それは矛盾を生み出し矛盾を理解していく建築創成プロセスそのものである。







# 生命的建築設計手法

建築における生命性は、最適化を目指した相対化のプロセスを回避しながら、遠心的な多様性を生成し続ける非淘汰の設計態度によって獲得される。本設計では【Abductional Modeling:閃きによる設計手法】によって全体像を持たない断続的な建築エレメントの集合体（延いては超個体）としての建築を構想する。

Architecture

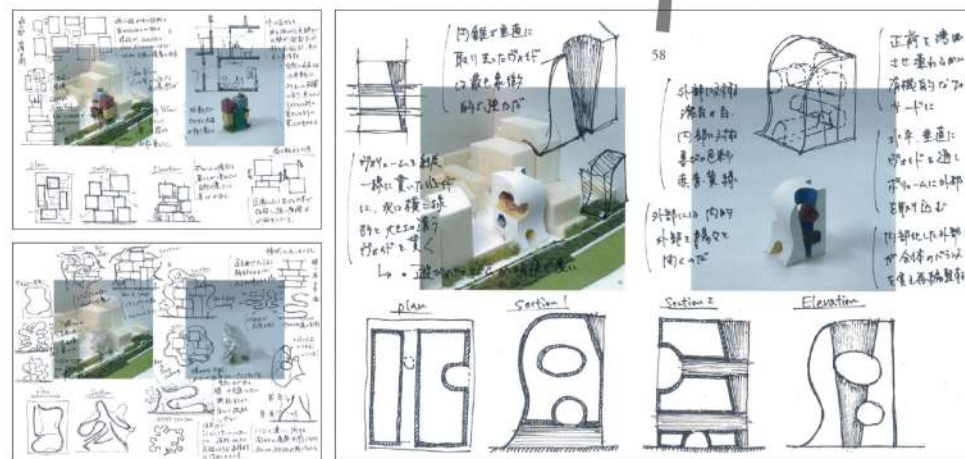
## 01: 建築の内延

建築を与条件の文脈や要請から解放し、建築を建築として考え、最適化の生成プロセスを回避することで、建築は建築の真価に内包される。解放された建築は多様化し遠心的に広がり続ける。これを建築の”内延”と呼ぶこととする。建築は1つの答えに漸近しない。いつまでも最適化されない過程の中で自己完結し存在としての価値、即ち”生命性”を獲得するのである。



## 02: 閃きとの邂逅

建築の内延で生成した100の建築に対して個別に独立的に対峙する。ここでも建築は与条件などに依拠した他律的存在としてではなく、建築そのものとして内延的に扱われる。模型として3次元的に出力された非言語的な建築の閃きを、平・立・断の2次元に翻訳し描写することで、その建築に内包される質と邂逅することが叶う。



閃きとの邂逅  
建築の内延で生成した100の建築に対して個別に独立的に対峙する。ここでも建築は与条件などに依拠した他律的存在としてではなく、建築そのものとして内延的に扱われる。模型として3次元的に出力された非言語的な建築の閃きを、平・立・断の2次元に翻訳し描写することで、その建築に内包される質と邂逅することが叶う。

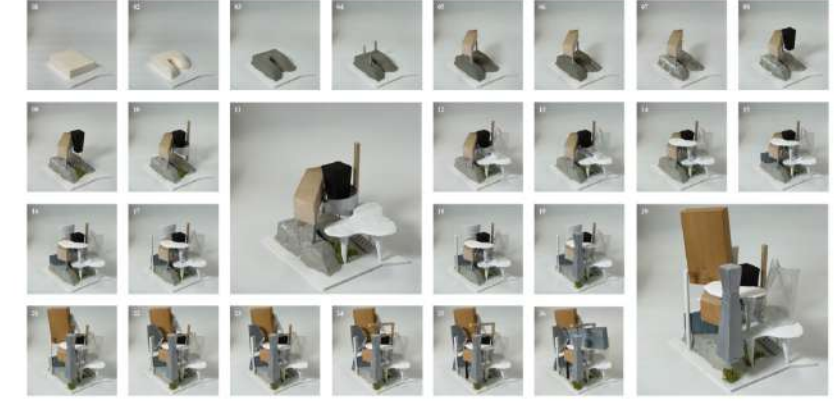
## 03: 時間と重力の「絶対的相対性」

1:50のAbductional modeling。最適化しない非淘汰なプロセスでは、建築創成の個々の操作が断続的に集合し、生命性を獲得する。不可逆な時間の中で建築を地面からビルドアップする。建築を建築として、相対化されない自己完結的な存在として扱いながら、しかし一方で、時間と重力という「絶対的相対性」即ち普遍的文脈の中で建築を思考するのである。また事後的に潜在する「建築の内延」を参照することで、閃きの履歴を確認する。



## 04: 自己文脈化するエレメント

全体像を持たない建築には床壁柱の区分がなく建築操作はニュートラルなエレメントと化す。自己完結する一つ一つの操作はその都度背景と前景の関係となり、過去の操作は最新の建築操作に対する敷地や地形のように見立てられる。即ち各エレメントが自己文脈化していくのである。



## 05: 設計者の内的相対性と葛藤

03,04と1:50のスケールにおいてAbductional modelingを行った。遠心的に多様化する建築の生命性は終わらないが、プロジェクトとしては、このフェーズを持って最終成果物とする。3つ目にして大きな発見があった。1つ目のAbductional modelingがもっとも生命的で閃きに溢れ、生き生きとしていたということである。これは、生命的建築設計手法が非線形どころか微分的には非最適化であることを意味する。最大の懸念は設計者の中で非相対化を過度に意識してしまうあまり、自由や閃きを減じ、その過程に多くの葛藤があったことだろう。しかし同時に、生命的建築設計手法の生命性も裏打ちされた。相対性に反比例して生命性は増加していくのである。この後は1:20のスケールにおいてより高まっていく身体性と具体性の中で、建築の生命性を希求していく。









